

『その問いかけに気づくか…』 ヨハネ18:33-38

18:33 さて、ピラトはまた官邸にはいり、イエスを呼び出して言った、「あなたは、ユダヤ人の王であるか」。

18:34 イエスは答えられた、「あなたがそう言うのは、自分の考えからか。それともほかの人々が、わたしのことをあなたにそう言ったのか」。

18:35 ピラトは答えた、「わたしはユダヤ人なのか。あなたの同族や祭司長たちが、あなたをわたしに引き渡したのだ。あなたは、いったい、何をしたのか」。

18:36 イエスは答えられた、「わたしの国はこの世のものではない。もしわたしの国がこの世のものであれば、わたしに従っている者たちは、わたしをユダヤ人に渡さないように戦ったであろう。しかし事実、わたしの国はこの世のものではない」。

18:37 そこでピラトはイエスに言った、「それでは、あなたは王なのだな」。イエスは答えられた、「あなたの言うとおり、わたしは王である。わたしは真理についてあかしをするために生れ、また、そのためにこの世にきたのである。だれでも真理につく者は、わたしの声に耳を傾ける」

18:38 ピラトはイエスに言った、「真理とは何か」。こう言って、彼はまたユダヤ人の所に出て行き、彼らに言った、「わたしには、この人になんの罪も見いだせない」。

●序論

私たちは日常の中で、ふとした瞬間に何か大切な問いかけを受け取っていたのに、気づかずに通り過ぎてしまうことがあります

これは、聖書を読んでいるときにもそうです。

だから、今読んでいるところを通して、「神さまは私に何か、問いかけているのではないか？」と、その問いかけを意識してみることです。

だから、すべての汚れや、はなはだしい悪を捨て去って、心に植えつけられている御言を、すなおに受け入れなさい。御言には、あなたがたのたましいを救う力がある。(ヤコブ1:21)

今日読んだ聖書箇所は、総督ピラトの前に立たれたイエスさまと、ピラトとのやり取り。この場面は、霊的な気づきへの問いかけが繰り返しなされている箇所でもあります。

ヨハネは、私たちにも同じ問いかけを投げかけています。

わたしたちは、気づき、そして御霊の助けをいただいて応答していくとき、イエスさまのくださる恵みの世界、神さまが迎えてくださっている御国の祝福へと入ることができる。それが今日の結論です。

●本論

I. ここに問いかけがある

ピラトは尋ねます。 「あなたは、ユダヤ人の王であるか」。 (:33)

ここでイエスさまは、単純に「そうだ」とも「違う」とも答えられませんでした。

逆にイエスさまが、問いかけました。それはピラトの心に向けた問いかけです。

「あなたがそう言うのは、自分の考えからか。それともほかの人々が、わたしのことをあなたにそう言ったのか」。(：34)

どんな状況の中でも、イエスさまはわたしたちの心を探る問いかけをする方です。

「あなたは、わたしが誰かを、自分の心で問い求めているのか。それとも他人の情報に左右されているのか」という風に。

わたしは子どもの頃から教会にいて、聖書のお話を聞きました。たくさんのお話を聞きました。問いかけられていたことでしょう。でも気づいていなかった…のが実際でした。

”鈍い”わたしの心をよくご存じの神さまは、何度も何度も御言葉のともなう奇跡をわたしに経験させてくださいました。…でもひととき喜んで、すぐに神さまを忘れる、そんな少年から青年の時を過ごしていたのです。

しかし、そういうすべてを経て、神さまはわたしの目を開いてくださいました。

霊的な気づきをくださったのです。

だから申し上げることが出来ます。この問いを聞くことが、霊的な目覚めの第一歩です。

ピラトはこの時、ローマの総督としてイエスさまの前に立っているつもりでしたが、実は、神の国への気づきへと招かれていたのです。

Ⅱ. 真理を示す方がいる

18:36 イエスは答えられた、「わたしの国はこの世のものではない。もしわたしの国がこの世のものであれば、わたしに従っている者たちは、わたしをユダヤ人に渡さないように戦ったであろう。しかし事実、わたしの国はこの世のものではない」。

イエスさまは、ローマでもユダヤでもない。永遠の神の国の王であることを語られました。ピラトは問いかけます。「それではあなたは王なのだな？」。

それに対するイエスさまの答えはこうでした。

…「あなたの言うとおり、わたしは王である。わたしは真理についてあかしをするために生れ、また、そのためにこの世にきたのである。…」(：37)

ここに、イエスさまのご生涯の使命が凝縮されています。

「真理について証しするため」「真理をあらわすため」にいられたのです。

真理に、それは絶対的で、歴史や状況によってゆがめられも、変えられることもないはっきりした正しい真実なものです。

聖書が語る「真理」とは、「神さまがこの世を愛し、救いのために御子を与えられた」という神のご計画。そこにある、神が人を、この世を愛している、という絶対的眞実・事実です。

ヨハネ3:16 神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。

わたしたちの目、ましてや神さまの目に映る、この世は、争いに満ちています。けれども神さまは、そのひとり子を下さるほどに、そんな”この世を愛して下さった”という真実、これこそ、真理です。

ピラトの目にイエスさまは、今まさに自分の判断ひとつで死刑にできる相手でした。しかしその方が、この世の権力や政治判断を超えた、神の救いの計画の中心に立っておられる、それが聖書が示すイエスさまの姿だったのです。

人が求め、またピラトが求めていたものと違う。

「…しかし事実、わたしの国はこの世のものではない」と言われたイエスさまは、力と権力、財力にあこがれるようなピラトに、別の国の、異なる価値観を示します。そしてここに、ピラトやわたしたちへの、イエスさまをめぐる問いかけがあるのです。

Ⅲ. 真理に心を開く機会がある

イエスは答えられた、「…だれでも真理につく者は、わたしの声に耳を傾ける」 (:37)

「真理」というものは、単なる良い情報ではなく、神さまの前に立たされている自分自身を知ることです。

つまり、「何が正しいか」を知ることで終わらない。そこで神さまの前に立つ自分自身の姿を照らし出される経験となるということです。

ピラトはイエスに言った、「真理とは何か」。(:38)

心の奥底では真理に対する問いを避けたい、けれども気になってしまう内面の葛藤の現れのように読めます。

ここで、明らかにピラトは、「問いかけられている」ことに気づいていたでしょう。

あらためて、わたしたちにもイエスさまの言葉が心に響きます。

「…だれでも真理につく者は、わたしの声に耳を傾ける」 (:37)

「はたしてピラトはどうしたか」ではなく、「はたしてわたしはどう受け止めているのか」と問われていることに気づくことです。

この問いかけについて、ともに主のもとに心を置くように、今日導かれているのです。

●さいごに)

先日、もと病棟チャプレンをされていた一人の先生の講演会を聴きに行きました。病の床にある方々のそばにいて、その心をケアする働きです。

一人の人が病の中におかれるとき、人は精神的にも、社会的にも、霊的にも痛み、痛みを持つ。そんな中、普段意識することもなかった「自分の生きる意味」をも問いかけを心を感じるようになる。その答えは、お金にも住まいにも家族にも見いだせないで、葛藤する。そういう痛みに寄り添われる働きであったそうです。

そういう中で、この先生は、聖書を開き、共にイエスさまに耳を傾けるときを持つのです。

普段、健康であるときにはあまり意識することのなかった問いかけを、わたしたちは病の中で、気づくことがあるかもしれません。

あなたを絶対的に支えてくれる存在は誰ですか？と。

ピラトに語られたイエスさまの言葉は、彼の中から「真理とは何か？」という言葉を引き出しました。 その後の彼についての詳細はわかりません。

一方で、イエスさまの言葉からはっきりしています。

「…だれでも真理につく者は、わたしの声に耳を傾ける」 (:37)

ああ、病気にならない限り、イエスさまの問いかけにさえ気づけないでいるかも…。 「気づけ、気づけ」と言われて、わたしたちは気づけるものではありません。

だから、わたしたちは自分自身のためにも祈るのです。どうかあなたの問いかけに気づかせてください…と。

そういう問いかけの一つが、「あなたはわたしをどう思うか？」。

以前も今も、わたしたちがイエスさまを、救い主、主と告白するとき、実に神さまからの助けがあったことを聖書も証言しています。

「…聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」と言うことができない。
(1コリント12:9)

聖霊の助けをいただけるよう、気づきをいただけるよう、そしてイエスさまについていけるよう、祈りましょう。そこから私たちは、「真理につく者」として、イエスさまの御声に聞き、またともに歩む者へと変えられるのです。